

# ゼバステイアン・ブラント 『阿呆船』 „Vberhebung der hochfart“ 〔「傲慢の思い上がり」〕に関する語学的考察

大 島 浩 英

## 要 旨

中世高地ドイツ語（中高ドイツ語）から新高ドイツ語へ移行する過渡期にある初期新高ドイツ語で書かれた風刺詩集 *Das Narrenschiff*（『阿呆船』）を本稿では取り上げる。アルザスの人文主義者・詩人のゼバステイアン・ブラントにより初期新高ドイツ語のアレマン方言を基礎に書かれたこの詩集には、中世ヨーロッパのキリスト教（カトリック）的倫理観に基づいて、人間の世俗的な欲望から行われる様々な愚行を戒めようとする内容の風刺詩が収められている。本稿ではこの詩集の中で「傲慢」をテーマにした詩 „Vberhebung der hochfart“ を対象に考察を行った。

今回の分析でも、Nhd. とは異なる母音の語形、形式的な機能にとどまらない接続詞 *frnhd. das* の多義性、不定関係代名詞としての *der* の使用、関係文内、副文内での定動詞の位置の不規則性、不完全な枠構造など、中高ドイツ語と新高ドイツ語の両方の要素が混在している言語状況が観察できたが、クニッテル詩句で書かれたこの詩については韻律が規則正しく整えられており、言語的な規範性とは別の、韻文としての高い整合性が見られた。

**キーワード**：初期新高ドイツ語、ゼバステイアン・ブラント、阿呆船、風刺文学、韻律、ドイツ語学

## はじめに

本稿で考察する文献は1494年バーゼルで発行された風刺詩集で、ドイツ語の時代区分では初期新高（地）ドイツ語に分類される言語で書かれた韻文である。初期新高ド

イツ語は中世高地ドイツ語（中高ドイツ語）から新高ドイツ語、さらには現代語へと続く中間段階にある言語で、通時的な言語変化の過渡的な状態が見られる興味深い対象と言える。本稿で取り上げる風刺詩集 *Das Narrenschiff*（『阿呆船』）はアルザスの人文主義者・詩人のゼバスティアン・ブラントにより執筆されたため、基本的には初期新高ドイツ語のアレマン方言が用いられているが、テキストはブラント自身によってある程度標準化、規則化されたことが推測される。

さてこの詩集には112の風刺詩が収められているが、それらの根底にあるのは、世俗における人間の欲望から行われる様々な愚行を戒めようとする中世ヨーロッパのキリスト教（カトリック）的倫理観であった。そのキリスト教世界における7つの大罪（罪源）のうち本稿では、「傲慢」を扱った詩 „Vberhebung der hochfart“ の1～38行目（全124行）までを取り上げ、語学的な分析を行うことにする。なおこの詩集は、一行に揚格（Hebung）が4つあり規則的に抑格（Senkung）と入れ替わる韻律をもつクニッテル詩句（Knittelvers）で、基本的には二行一組で脚韻を踏む形式（Paarreim）で書かれている。本文の和訳では韻律に関係なくできるだけ逐語訳を行い、また原文には5行ごとに行数を付した。

#### 使用テキスト

##### 原文：

Sebastian Brant: *Das Narrenschiff*. Studienausgabe. Mit allen 114 Holzschnitten des Drucks Basel 1494. Hrsg. von Joachim Knappe. Stuttgart 2005. (Reclams Universal-Bibliothek Nr. 18333) S. 426-428.

##### 現代語訳：

Sebastian Brant: *Das Narrenschiff*. Übtg. von H. A. Junghans. Hrsg., Anm. u. Nachw.: Mähl, Hans-Joachim. Stuttgart 1964. Bibliographisch ergänzte Ausgabe 1992. (Universal-Bibliothek Nr. 899) S. 339-340.

上記および次の各テキストに付された注釈を適宜参考にした。

Sebastian Brant: *Das Narrenschiff*. Hg. von Felix Bobertag. Berlin und Stuttgart 1889. (Deutsche National-Litteratur. Hg. von Joseph Kürschner, Bd. 16) S. 249-250.

Zarncke, Friedrich: *Sebastian Brants Narrenschiff*. Leipzig 1854. (Hildesheim 1961) S. 434-435.

略語：mhd. 中（世）高（地）ドイツ語、frnhd. 初期新高（地）ドイツ語、  
nhd. 新高（地）ドイツ語

本文中の Knappe, Junghans, Bobertag, Zarncke に関する注釈、説明などの記述は、すべて上記の文献からの引用である。

I

原文	[92] (題詩)	現代語訳
Wer hochfart ist / vnd düt sich loben		Wer Hoffart liebt und tut sich loben
Vnd sytzen will alleyn vast oben		Und sitzen will allein hoch oben,
Den setzt der tüfel vff syn kloben		Den setzt der Teufel auf den Kloben.
傲慢な上にうぬ惚れで		
自分が最上位を独り占めしなければ気が済まぬ者		
そいつを悪魔がおとり棒に据え付ける		

1 行目の hochfart は中高ドイツ語の女性強変化名詞で「高慢<sup>1)</sup>」を意味する hochvart、hoffart に対応しているが、ここでは不定関係代名詞で表される「人」の性質を示す述語形容詞 mhd. hochverte として名詞の hochvart が用いられている。新高ドイツ語訳では名詞の Hoffart を lieben の 4 格目的語とする表現に訳されている。düt sich loben では nhd. tun + 不定詞の形が現れており韻律を整えるための書き換えが行われている。tun を用いない場合とでほとんど意味的な差異はないとされるが<sup>2)</sup>、現代語の口語調では本動詞の意味を強調する作用も含まれる。„Wer hochfart ist“ の部分では脚韻を考慮する必要がないため定動詞 ist が後置されているが、行末の loben は次行の oben とで脚韻を踏めるよう定動詞 düt の代わりに後置されている。脚韻を踏ませる条件がなければ Nhd. のように副文内での定動詞後置がある程度意識されていたかもしれない。

2 行目では wer の不定関係代名詞に導かれる副文が継続していると考えられるため、定動詞 will は本動詞 sytzen の後に下がっているが、脚韻の関係で後置されるには至っていない。また vast oben の vast については、nhd. ganz (「まったく」) という説明が Zarncke により加えられている。3 行目では tüfel (<mhd. tiuvel) が Nhd. で Teufel と母音変化する以前の語形で現れている。この母音は19行目 tütscher (>nhd. deutscher)、30行目 tütschem (>nhd. deutschem) などにも見られ、また syn kloben の syn は nhd. sein へと二重母音化する前の長母音で現れている。3 行目文末の kloben に対しては Knape が、「おとりの鳥をのせる鳥捕獲用先割れ棒」という説明を加えている<sup>3)</sup>。この題詩では、loben、oben、kloben の 3 行で脚韻を踏む。

II

Vberhebung der hochfart

傲慢の思い上がり

Der furet vff eym strowen dach

Der vff der welt rûm / setzt syn sach

藁ぶき屋根に火をかける

世間の名声に重きを置く者は

Überhebung der Hoffart

Der macht ein Feuer auf strohernem Dach,

Wer auf der Welt Ruhm setzt sein Sach

ここでは2行目文頭の der が現代語訳のように不定関係代名詞 wer として機能しており、1行目の der がそれを受ける指示代名詞と考えられるため、不定関係代名詞に導かれる関係文から書き出される現代語とは順番が入れ替った用法がここには見られる。意味の流れを追って2行目から見てみると、不定関係代名詞として用いられた der に導かれる副文において、vff der welt rûm の der welt は修飾する語 rûm の前に置かれたいわゆるザクセン2格と思われる。また setzt との関係で vff が方向を表すため、rûm は4格で用いられていることになり、「自分の（なすべき）ことを世間の名声の上へ置くような者は」といった意味が表現されているものと考えられる。ここでも副文内で定動詞 setzt が、正置はされていないものの後置されるには至っていない。そしてこの不定関係代名詞を1行目の指示代名詞 der が受け、主文へと続く。1行目の furet は mhd. viuren に由来し、Nhd. の feuern に対応するものである。また eym は Nhd. での einem が縮約された形で現れ、これにより揚格と抑格が規則的に交替し韻律が整えられている。ここでは1行目 dach と2行目 sach で脚韻を踏んでいる。

Vnd all ding dût / vff zyttlich ere

Dem würt zû<sup>4)</sup> letst nüt anders me

世俗の名誉を求めて何でもするような者は

結局何も得ることがない

Und alles tut um zeitliche Ehr;

Dem wird zuletzt nichts andres mehr,

3行目は2行目の不定関係代名詞に導かれる関係文の続きと考えられるが、ここでも定動詞の dût が副文の中で後置されてはいない。また zyttlich でも nhd. zeitlich の ei へ二重母音化する前の長母音 i が y で表記されている。原文の vff zyttlich ere が現代語訳では um zeitliche Ehr というように前置詞が vff から um に書き換えられてお

ゼバステイアン・ブランド『阿呆船』„Vberhebung der hochfart“（「傲慢の思い上がり」）に関する語学的考察  
 り、いずれも「～を求めて」という意味で用いられている。また、この zyttlich に対しては Knappe が „begrenztes (irdisches) Ansehen“（「限りある現世の（はかない名声）」という注釈を付けている。

4 行目の dem は 2 行目から続く不定関係代名詞を 3 格で受ける指示代名詞で、この文は「その者にとっては結局（5 行目の内容）以外の何ものにもならない」という逐語的な意味になる。また Frnhd. で円唇化した ü が Nhd. では定着せず、Nhd. の標準語では i の母音へ変化する場合もあることが知られているため、この文の würt は接続法過去（2 式）ではなく Nhd. では直説法現在の wird と考えられ、主語の nüt に対応している。ere、me とで脚韻を踏む。

Dann das syn won / jnn hatt betrogen	5	Als daß sein Wahn ihn hat betrogen,
So er buwt vff eyn rāgenbogen		Wie einer baut auf Regenbogen.

彼の妄想が彼を欺いたということ以外の  
 彼が虹の上に建物を築くように

5 行目文頭の dann は現代語で als（「～以外」）との重複を避ける場合に用いられる denn に対応して 4 行目の nüt anders にかかり、後続の das (>nhd. dass) 文と組み合わせて、文意は「彼の妄想が彼を欺いた、ということ以外の何ものにもならない」となり 4 行目につながっている。またここでは、従属接続詞 das に導かれる副文内での定動詞 hatt の位置が定形後置にある程度まで近づいていることが分かる。また nhd. Wahn には won が対応しており、o から a への母音変化も見られる。

6 行目の so には現代語の wie, als（「～のように」）という従属接続詞としての用法が想定できるため、「彼が虹の上へ建物を築くように（彼の妄想が彼を欺いた）」という意味でこの文が 5 行目にかかっているように思われる。この表現に対して Bobertag は „baut in die Luft, auf Sand“（「空中へ、砂の上へ築く」）という説明を加えており、これは「砂上の楼閣」にもつながり、「虹」と「砂」がはかないもののイメージとして共通していることが分かる。なお、従属接続詞としての so に導かれたこの副文内では定動詞 buwt が主語 er の直後に位置しており、副文内での定動詞後置はここでは意識されていないものと思われる。betrogen と rāgenbogen で脚韻を踏む。

Wer wölbet vff eyn dānnyn sul	Wer wölbt auf eine Tannensäule,
Dem würt ee zyt / syn anschlag ful	Des Anschlag zeigt vorzeitig Fäule;

モミの柱の上に丸天井をつける者  
 その者のもくろみは早々にだめになる

7行目では不定関係代名詞を2行目のように der で代用するのではなく wer が用いられ、不定関係代名詞として wer と der が併存している。この関係文内で定動詞 wölbet は第2位に正置されており、副文内での定形後置は意識されていない。またこの行に対して Knappe は „über einer Säule von Tannholz baut“ (「モミ材の柱の上に築く」) という説明を加えており、モミの木の柱という不安定な土台の上に立派なものを築こうとする危うさ、はかなさがここでは表現されているように思われる。

8行目の ee は、mhd. e (「より以前に」) が前置詞として用いられたもので、これに対して „vor der Zeit“ (「早々と」) という説明が Bobertag によってなされている。この行の文意は「その者のもくろみは早々に腐敗する (朽ち果てる)」といった直訳となり、dannyn sul (「モミの木の柱」) に anschlag (「もくろみ」) を重ね合わせた表現が行われている。書記法については nhd. wird に対応する語が8行目では würt、4行目では würt となり表記に揺れが見られ、また音韻面では7行目の sul と8行目の ful とで同じ母音であったものが Nhd. ではそれぞれ nhd. Säule、nhd. faul へと異なって二重母音化する現象が見られる。ここでは原文の sul、ful で脚韻を踏んでいる。

Wer rûm vnd weltlich ere hie bgerdt                      Wer Ehr und Weltruhm hier begehrt,  
Der wart nit / das jm dort me werdt /    10    Erwart' nicht, daß ihm dort mehr werd.  
この世で名声と世俗の名誉を欲する者は  
あの世でそれ以上を期待してはならない

9行目の文でも不定関係代名詞が用いられているが、定動詞が正置された7行目とは対照的に wer に導かれる関係文内で定動詞 bgerdt が文末に置かれ、現代語のように定動詞後置が実現されている。韻律の条件が満たされれば副文内での定形後置による枠構造という文法規則がある程度意識されているものと思われる。また1行内に揚格(強格)4つが原則のクニッテル詩句において、強弱を規則的に交替させると、この行には例外的に揚格が5箇所見られる。

10行目の wart は「期待する」(nhd. erwarten) という意味の他動詞として、ここでは前綴りのない基礎動詞のみの形で用いられている。また wart の語形には3人称単数現在の語尾 et の t と語幹の t が e の脱落により融合する Ekthlipsis<sup>6)</sup>が見られる。10行目の従属接続詞 das (>nhd. dass) に導かれる副文内では定動詞 werdt が後置され、枠構造が成立している。また werdt については Mhd. の直説法現在で er wirdet, wirt と変化することから、10行目の werdt は3人称単数の接続法現在(1式)と考えられる。

ゼバステイアン・ブランド『阿呆船』„Vberhebung der hochfart“（「傲慢の思い上がり」）に関する語学的考察

また、10行目の dort（「そこ」）を Bobertag は „im jenseits“（「あの世、来世」）と説明していることから、9行目の hie（「ここ」）は「この世、現世」の意味と解され、hie と dort がこれらの意味で対比的に用いられているものと思われる。bgerdt と werdt で押韻している。

### III

Manch narr halt sich gar hoch dar vmb	Manch Narr von Hochmut ist entbrannt,
Das er vß welschen landen kum	Weil er gekommen aus welschem Land
かなりの阿呆がそれゆえにおごり高ぶる	
自分が南国（ロマンス語系諸国）帰りということに	

11行目では halt sich gar hoch が「自ら（の価値）を高くつり上げる」といった意味に解される。halt の語形については語尾の t で Ekthipsis が見られ、また語幹の母音が Nhd. のように 3 人称単数現在でウムラウトしていない。dar vmb の dar は次行の内容を指しているものと思われる。12行目の das (>nhd. dass) に導かれる副文内では定動詞 kum が後置されており、現代語と同様に枠を作る語順が成立している。この定動詞 kum は語形的には mhd. komen, kumen の 3 人称単数接続法現在に対応し、人称変化語尾 e が脱落した形と考えられる<sup>7)</sup>。また直説法過去の場合、Mhd. では ich/er kom, kam, quam となり、kum を過去形と解するには無理がある。vmb と kum で脚韻を踏む。

Vnd sy zü schülen worden wiß	Und man auf Schulen ihn unterwies
Zü Bonony / zü Pauy / Pariß	Zu Bononi, Pavia und Paris
また、大学で学識を身につけた（ということに）	
ボローニャ、パヴィアにパリで	

13行目は11行目の dar vmb の dar が指す内容の続きで、12行目の das に導かれる副文である。定動詞 sy は mhd. sin (>nhd. sein) の接続法現在 mhd. si と考えられ、ここでは現在完了の助動詞として機能している。また worden は mhd. werden（「～になる」）の過去分詞で、現代語のように前綴り ge- は付加されていない。音韻面においては zü<sup>0</sup>ではなく zü<sup>1</sup>となつて u がウムラウトしており、wiß では nhd. weise（「賢い」）へと二重母音化する前の長母音の語形が見られる。この行を現代語に逐語的に書き換えてみると、„Und (er) sei zu hohen Schulen weise geworden“（「(彼が)

高等な学校で賢くなった』) といった文になり、文中の zu は現代語では an で表現される。さてこの文は副文であるが定動詞 sy は後置されず、また脚韻のため wiß worden とはならず wiß が行末に配置されている。14行目の Bonony (=Bologna)、Paüy (=Pavia) はイタリア、Pariß (=Paris) はフランスのそれぞれ有名な大学都市で、これらの都市の中にある大学という意味で前置詞 zū が使われ古い表現となっているが、現代語ではこの場合前置詞 in が通常用いられる。ここでは wiß、Pariß で脚韻を踏む。

Zûr hohen Syen jnn der Sapienz	15	Und zu Hoch-Sien in der Sapienz
Ouch jnn der schûl zû Orlyens		Und in der Schule zu Orliens,
英知の中にある高尚なシエナにて		
またオルレ안의学校においても		

15行目の前置詞 zûr は nhd. zu der のように定冠詞が融合した形式と考えられるため、この定冠詞が Syen という地名にかかるのではなく、Knappe が注解しているように hohen という付加語形容詞の後に Schule (「学校」) などの単数 3 格の女性名詞を補い、「英知の都シエナの高尚な学校 (大学) にて」という意味にとるのが妥当であろう。16行目も前述と同様に、Syen (=Siena) はイタリアの、そして Orlyens (=Orleans) はフランスの有名な大学都市で、Zarncke によると、ブラントの時代には上記の都市は特にドイツ人によって訪れられるのが常であったといわれている。なお、ouch は後に舌の位置が下がり Nhd. では auch と母音が変化する。ここでは Sapienz と Orlyens で脚韻を踏んでいる。

Vnd den roraffen gsâhen hett	Daß er den Roraffen gesehen hätt
Vnd Meter pyrr de Conniget /	Und Meister Peter von Conniget.
わめき猿も見てきたし	
それにピエール先生にも会ってきた	

17行目は12行目の das (>nhd. dass) から続く副文の内容であるため、定動詞として機能している完了の助動詞 hett がここでは現代語のように後置されており、枠構造が成立している。また hett は mhd. han の接続法過去形 hette に対応し、この行が副文の内容であることを明示しているものと思われる。frnhd. sehen の過去分詞 gsâhen では、e が語中音消失することで揚格が 4 つとなり韻律が整っている。ここで述べられている den roraffen (「わめき猿<sup>9)</sup>」) については、「シュトラースブルク大

ゼバステイアン・ブランド『阿呆船』„Vberhebung der hochfart“ (「傲慢の思い上がり」)に関する語学的考察  
聖堂のオルガンに付いている、定期的にオルガンの巻き上げ装置によって動く(猿の)  
像」という説明が Knappe によって行われている<sup>10)</sup>。また Junghans によると、18行目  
の pyrr de Conniget は Peter von Bruntrut を訳した maître Pierre de Conniget とい  
う架空の学者名とも言われており、ここでは17行目のわめき猿と並んで gsâhen の目  
的語となっている。hett と Conniget で脚韻を踏む。

Als ob nit ouch jnn tütscher art                      Als ob nicht auch in deutscher Art  
Noch wer vernunft / synn / houbter zart    20    Vernunft und Sinn noch sei bewahrt,  
まるでドイツ風の流儀にはまだ存在しないかのように  
理性、思慮、繊細な頭脳が

19行目の als ob については現代語と同様に非現実の同等比較として表現されてい  
るため、対応する20行目の定動詞 wer (>nhd. wäre) が接続法過去で用いられている。  
この als ob に導かれる副文内の主語は vernunft、synn、houbter zart の3つと考え  
られるが、このうち houbter は mhd. houbt, haupt の複数形 mhd. hœupter (>nhd.  
Häupter) に対応するもので、二重母音が ou から Nhd. での au へと変化する以前の  
形が見られる。このことは19行目の ouch (>nhd. auch) にも言える。そしてこの  
houbter を修飾していると思われる形容詞 zart が houbter の後ろに置かれ、zart に  
対しては文化程度の高さを表現する意味として feinsinnig (「神経の細やかな」)  
(Knappe)、liebe (「優しい、好ましい」) (Bobertag) といった注が付けられている。  
art、zart で脚韻を踏む。

Do mit man wißheyt kunst möcht leren    Daß man Weisheit und Kunst könnt lehren,  
Nit not / so verr zû schülen keren              Ohn fern auf Schulen sie zu hören.  
学問、知識を学べるには  
ずっと遠くの学校へ出向く必要なしに

21行目の do mit は Nhd. の damit に対応し「目的」を表す用法と考えられ、möcht  
は「可能」を表す mhd. mugen の接続法過去で非現実的な意味合いを含んでいるよ  
うに思われる。そして leren (>nhd. lehren) は「教える」ではなくここでは nhd.  
lernen (「学ぶ」) の意味で用いられているため、この行は直訳すると「人が学問、知  
識を学ぶことができるためには」といった意味になる。<sup>11)</sup>

22行目の not は Nhd. と同様に「必要」を意味しており、それが nit で打ち消され  
ているため、この nit は Nhd. の前置詞 ohne (「～なしに」) と類似する意味に解され

る。次に続く語句は not の内容を示す zu を伴わない不定詞句と考えられ、この行全体では「学校に向かって大そう遠くへ赴くという必要なしに」といった逐語訳になる。21行目の「学ぶ」という意味での *leren* と *keren* で脚韻を踏んでいる。

Weller will <i>leren</i> <i>jnn</i> <i>sym</i> <i>land</i>	Wer lernen will in seinem Land,
Der fyndt yetz <i>bücher</i> aller hand	Der findet jetzt Bücher allerhand,
自国で学問を志す者は	
いろんな書物を今では見つけられる	

23行目の *weller* はここでは不定関係代名詞 *wer* として用いられているが、定動詞 *will* はこの関係文の中でも第2位に正置されている。また、文頭に抑格をおいて揚格との規則正しい交替が可能となるように、文頭に *wer* ではなく *weller* (>nhd. *welcher*) という語形を用いたのかもしれない。またここでも *leren* が nhd. *lernen* の意味で用いられている。*wer* を受ける所有代名詞 *sym* は nhd. *seinem* に対応し、ここでは縮約された形で現れ韻律を整えている。

24行目文頭の指示代名詞 *der* は前行の不定関係代名詞 *weller* を受け、24行目の文意は「(自国で学問を学ぼうとする者は) 今ではいろんな書物を見つけられる」となり、ここには「ドイツにおいても」という含意があるものと思われる。また *fyndt* (>nhd. *findet*) では *Ekthlipsis* によって *fynd* とはなっておらず、*e* が脱落した人称変化語尾 *t* がまだ見られる。ここでは *land*、*hand* で脚韻を踏む。

Das nyeman mag entschuldigen sich	25	Daß niemand kann entschuldigen sich,
Er well dann liegen lästerlich		Er wolle denn lügen lästerlich.
それゆえ誰も言い訳できぬ		
その者つまり、不名誉に嘘をつこうとしているのだ		

25行目文頭の *das* には単に形式的な機能だけではなく、前行の *aller hand* (「様々な」と関連して結果を表す意味合いが含まれていると考えられ、「(様々な書物が見つけられる)ので、その結果誰も(ドイツでは学問はできないと)言い訳することはできない」という意味にこの場合は読める。初期新高ドイツ語の接続詞 *das* (>nhd. *dass*) には状況に応じた意味が付加されて用いられる傾向があることが分かる。*nyeman* では Nhd. で語尾に *t(d)* が付加される前の語形が見られ、また、「可能」を表す定動詞 *mag* は韻律との関係から副文内で後置されていない。26行目の *well* は mhd. *wollen*、*wellen* の3人称単数現在形に対応し、Mhd. でも *er wil*、*wile* と人称変

ゼバスティアン・ブランド『阿呆船』„Vberhebung der hochfart“ (「傲慢の思い上がり」) に関する語学的考察  
 化するが、この行では幹母音に e を残した語形で現れている。また liegen では円唇  
 化が進んで nhd. lügen となり、ie が ü へと円唇母音化する<sup>12)</sup>。sich と lästerlich で脚韻  
 を踏む。

#### IV

Man meynt ettwan es wer keyn ler	Man meinte einstmals, es gäb keine Lehre
Dann zû Athenas über mer	Als zu Athenas überm Meere,

学問は存在しないと、かつては言われていた  
 海の向こうのアテネ以外には

27行目の es 以下は meynt の内容を表す部分で、文法的な主語 es を立て本来の主語は keyn ler (>nhd. keine Lehre) で表現されている。meynt の内容であることを明示するため sein 動詞が wer (>nhd. wäre) と接続法過去で記述されたものと思われる。そしてこの wer と文末の ler がともに語末音消失していることで韻律が整えられている。また ettwan (「かつて」) に対しては „zur Zeit der Römer“ (「ローマ人の時代」) という説明が Bobertag によって行われている。28行目文頭の dann は前行の keyn と呼応して「～以外には (存在しない)」という「除外」を表す意味で用いられている。「除外」の意味は現代語では als、あるいは denn で表現されるが、Frnhd. では denn と dann 両方の語が競合して現れる。ここでは ler と mer で脚韻を踏んでいる。

Dar noch man sy / byn walhen fandt	Darnach man sie in Welschland fand:
Jetzt sicht mans ouch jn tütschem land	30 Jetzt blüht sie auch im deutschen Land,

後にはイタリア、フランスにも学問があり  
 今ではドイツでも見られる

29行目では Nhd. の danach (「その後」) に対応する dar noch が従属接続詞のように用いられ、定動詞 fandt が後置されている。過去形の定動詞 fandt には、無声化したことを示す dt の表記が見られる。byn (>nhd. binnen 「～の内」) は mhd. bi in に由来し、bi の長母音 i が原文では y によって表記されている。byn はここでは時間的意味ではなく、空間的な innerhalb (「～の内側」) の意味で使われており、27行目の ler (>nhd. Lehre 「教え、学問」) を受ける人称代名詞 sy とともにこの行は、「その後はロマンス語地域の人々 (Welsche) の内にも学問が見出されるようになり」と

いった意味に訳せる。30行目ではこの *ler* を融合形 *mans* の *es* で受け、さらに *nhd. auch* に変化する前の二重母音をもつ *ouch* を伴って、この文は「今や人々はそれをドイツ人の地においても見る」という直訳になる。いずれも無声化した語末音の *fandt*、*land* で脚韻を踏んでいる。

Vnd gbrāst vns nüt / wer nit der wyn Und nichts gebräch uns—wär nicht der Wein,  
 Vnd das wir tütschen voll wennt syn Und daß wir Deutsche *voll* wollen sein  
 われわれには何も不足していない、ワインはないが  
 それゆえ、われわれドイツ人は満ち足りているのだ

31行目の *gbrāst* は *mhd. gebresten* (「欠けている」) に由来し、ここでは3人称単数現在 *gebrestet* の語尾 *et* から *e* が語中音消失したため、語幹の *t* と語尾の *t* が融合して原文の *gbrāst* のような語形が現れている。また接頭辞の *ge-* でも *e* が語中音消失を起こしており、これにより韻律の調子が保たれている。否定詞については *nüt* が *nhd. nichts* に、*nit* が *nhd. nicht* にそれぞれ対応しており、使い分けが行われている。*wer* (>*nhd. wäre*) は接続法過去で非現実的な意味合いが加わり、また *mhd. win* が原文では *wyn* (>*nhd. Wein*) と表記され、*Mhd.* の長母音 *i* が *y* で代用されている。

32行目文頭の *das* は形式的な機能に加えて、この場合前文と関連して「それゆえに」という結果を示す *so dass* の意味で使用されているように思われる。*wennt* については *mhd. wellen* に対応し、1人称複数現在で語中の *ll* が脱落した形態と考えられ、*-ent* という人称変化語尾は *Frnhd.* では地域により *wir*, *ihr*, *sie* すべての複数現在の人称で見られた<sup>13)</sup>。*voll* はここでは *nhd. vollkommen* (「完全な」) という意味の述語形容詞と思われ、完全であろうとするこういった姿勢に対して *Zarneke* は「外国人に最も不快と感ぜられるドイツ人の大きな国家的悪徳」と述べている<sup>14)</sup>。なおこの行では *das* (>*nhd. dass*) に続く副文内で定動詞 *wennt* が後置されず、前行の *wyn* と *syn* とで脚韻を踏む。

Vnd mōgen keyn recht arbeit thun	Und hätten gern ohn Arbeit Lohn.
Wol dem / wer hat eyn wisen sūn	Wohl dem, der hat einen weisen Sohn!

そして実際の苦勞などしなくてもよい  
 賢い息子をもつ者は幸せだ

33行目は前文の *das* に導かれる副文で32行目の主語 *wir* が共有されているが、「可

ゼバステイアン・ブランド『阿呆船』„Vberhebung der hochfart“（「傲慢の思い上がり」）に関する語学的考察  
 能（当然）」を表す定動詞 mögen はここでは後置されていない。また34行目では先行詞としての指示代名詞 dem を不定関係代名詞 wer が受ける用法が見られる。そしてこの wer 以下は関係文で副文となるが、定動詞の hat はここでは後置されない。eyn wisen sūn での男性 4 格の不定冠詞 eyn には -en の語尾が欠落しているが、これにより韻律上、揚格と抑格のリズムが規則的に交替する。また、eyn に続く wisen は mhd. wis(e)（「賢明な」）に由来する形容詞だが、Mhd. の長母音 i が原文の wisen では y ではなく i で表記されている。ここでは thūn、sūn で脚韻を踏んでいる。

Jch acht nit / das man vil kunst künn 35 Nicht acht ichs, daß man Wissenschaft  
 Vnd stell do mit noch hochfart gwynn Hoffärtig treibt, nach Vorteil gafft  
 私は評価しない、人が多くの学問を知り、  
 それでいて傲慢の利得を追い求め

35行目の acht (<mhd. ahten) は人称変化語尾 e が脱落した形で現れており、ここでは「尊重する、高く評価する (schätzen)」といった意味で用いられている。そして次にくる das (>nhd. dass) 文は37行目の klüg まで続き、この acht の指す内容としてつながっている。行末の künn は mhd. können（「知っている、理解している」）の接続法現在 künne から e が脱落した語形と考えられ、またこの定動詞が文末に後置されていることなどから、この部分は acht の内容を示す副文であることが Nhd. と同様に意識された表現であると考えられる。

36行目では定動詞 stell が平叙文のように配置されており、前行の das から続く副文であることがここでは明示されない。stell は接続法現在と考えられ noch (>nhd. nach) と組み合わせて「得ようと努める」ことを意味している。hochfart gwynn については Zarncke が、hochfart は gwynn にかかる 2 格（属格）とする見解を述べている。do mit は Nhd. の damit に対応するものと思われ、また gwynn で ge が語中音消失することで韻律が保たれている。ここでは揚格となる母音が künn と gwynn で異なっているが、かろうじてこの 2 語で脚韻を踏んでいる。

Vnd meynt dar durch syn stoltz / vnd klüg Und will dadurch sein stolz und klug:  
 Wer wis ist / der kan kunst genüg Wer weise ist, der kann genug.  
 それを誇りとしたり、利口とすることを  
 賢明な者は十分な学識をもっている

37行目も35行目の das から続く副文の内容と考えられるが、35、36行目の定動詞

künn、stell がいずれも man を主語とする 3 人称単数接続法現在で人称変化語尾 e が脱落したと思われるのに対して、37行目の定動詞 meynt (「思う」) では 3 人称単数直説法現在の人称変化語尾 t が付されており、副文の中に接続法と直説法が併存する例が見られる。また dar durch (「それを通じて」) 以下が meynt の内容として、zu を伴わない不定詞句で記述されていると思われる。

38行目文頭の wer は不定関係代名詞で、ここでは関係文内の定動詞 ist が副文末に後置され、さらに wer を指示代名詞 der が受けて主文に続いており、現代語と同じ用法が成立している。指示代名詞 der に続く主文の定動詞 kan (<mhd. kunnen, können) は35行目の künn とは異なり、ここでは 3 人称単数直説法現在で表現されている。また genüg については ge- で語中音が消失しておらず、e の音を残すことによって揚格と抑格が規則的に交替するよう韻律が調整されている。nhd. weise (「賢明な」) に対応する語として38行目には、二重母音化する前の長母音をもつ wis が用いられているが、13行目では wiß と表記され、書記法に揺れが見られる。ここでは klüg、genüg で脚韻を踏む。

## おわりに

従来行ってきた分析と同様に今回の考察でも、Nhd. とは異なる母音の語形、形式的な機能にとどまらない接続詞 frnhd. das の多義性、不定関係代名詞としての der の使用、関係文内、副文内での定動詞の位置の不規則性、不完全な枠構造など、中高ドイツ語と新高ドイツ語の両方の要素が混在している言語状況が観察できたが、言語としての規範性とは別に、この詩は韻文としてクニッテル詩句 (Knittelvers) で書かれているため、揚格の数、抑格と規則正しく入れ替わる整った韻律などはかなり厳格に守られており、韻文としての完成度が高いように思われる。そしてこのようなテキストにおいても Nhd. に近づいた用法の文例が見られることから、韻律を優先させながらも Nhd. の言語的規則がある程度意識されていたことが分かる。

### 注：

- 1) Baufeld, Christa: Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1996. S. 129. „hoffart“ の項目では „Hochmut, Übermut, Stolz (「高慢」)“ と説明され、さらに „Hauptsünde (「大罪」)“ という記述がある。
- 2) 工藤康弘、藤代幸一 『初期新高ドイツ語』 大学書林 1992年、99頁
- 3) „gespaltener Holzstock zum Vogelfang, auf den man den Lockvogel setzte.“
- 4) mhd. lest > frnhd. letst > nhd. letzt
- 5) 工藤康弘、藤代幸一 前掲書、44頁

ゼバステアン・ブランド『阿呆船』„Vberhebung der hochfart“ (「傲慢の思い上がり」)に関する語学的考察

- 6) 工藤康弘、藤代幸一 前掲書、78頁
- 7) 3人称単数直説法現在では mhd. er kum(e)tとなり、人称変化語尾 tが付加される。
- 8) ゼバステアン・ブランド著 尾崎盛景訳『阿呆船(下)』現代思潮社 1968年、280頁
- 9) 同書、280頁
- 10) Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Studienausgabe. Hrsg. von Joachim Knappe. Stuttgart 2005. S.425. „Figur an der Orgel des Straßburger Münsters, die zu bestimmten Gelegenheiten durch das Windwerk der Orgel in Bewegung gesetzt wurde.“
- 11) Grimm, J. / Grimm, W.: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854-1971. (dtv 5945) Bd. 10. Sp. 598.
- 12) 工藤康弘、藤代幸一 前掲書、44頁
- 13) Ebert / Reichmann / Solms / Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993. S. 233f.
- 14) „das grosse, von den ausländern am widerlichsten empfundene, nationallaster der Deutschen, [...]“ 点線は筆者。

#### 上記以外の参考文献：

- Götze, Alfred: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967.
- Koller, Erwin / Wegstein, Werner / Wolf, Norbert Richard (Hrsg.): Neuhochdeutscher Index zum mittelhochdeutschen Wortschatz. Stuttgart 1990.
- Lemmer, Manfred (Hrsg.): Das Narrenschiff. 3., erw. Aufl. Tübingen 1986.
- Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch. Band I, II, III. Stuttgart 1992. (Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1872-1878 mit einer Einleitung von Kurt Gärtner)
- Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38. Aufl. Stuttgart 1992.
- Paul / Wiehl / Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik. 23. Aufl. Tübingen 1989.
- Stammler, Wolfgang (Hrsg.): Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. Band I. Berlin und Leipzig 1933.
- 伊東泰治、馬場勝弥、小栗友一、松浦順子、有川貫太郎編『新訂・中高ドイツ語小辞典』同  
学社 2001年
- 川口洋『キリスト教用語独和小辞典』同学社 1996年
- 工藤康弘「初期新高ドイツ語における主文の枠構造について —16世紀の資料に基づく分  
析—」『ドイツ文学』第92号 1994年、25-34頁
- 古賀允洋『中高ドイツ語』大学書林 1995年
- 古賀允洋『中高ドイツ語辞典』大学書林 2011年
- ゼバステアン・ブランド著 尾崎盛景訳『阿呆船(上)』現代思潮社 1968年
- 山口四郎『ドイツ韻律論』三修社 1973年